

「ねえねえべとろさんて知ってる？」

「だれ？ ガイジン？」

「昔日本に渡ってきた宣教師よ」

「ザビエルのマブダチ？」

「つてほどじゃない、マイナー宣教師だったの。でも布教はおんなじ位頑張った。日本はね、その時キリスト教を信じるのが禁止されてたんだつて。キリスト教は人類皆平等を説くけど、その教えが正しいなら、大名が百姓から年貢を取り立てるのはおかしいでしょ？ 一揆をおそれた国の人はキリスト教を日本から閉め出して、教えを信じてる人たちをすごい拷問をかけたのよ」

「い、拷問つてどんな？」

「すっごいエグいの。逆さ吊りで火炙りにしたり水牢に入れたり……あ、水牢は知ってる？ 首の上まで水を満たした牢屋に閉じ込めてほつとくんだけど、座つたら溺れちゃうしでうっかり気絶もできない。そんな状況で何日も立ちっぱなしでいるとね、身体がぶよぶよにふやけちゃつて」

「聞きたくない。てかなんでそんなこと知ってるの、あんた拷問マニア？」

「それほどでも」

「褒めてないし照れないで。ペとろさんは？ まだ出てこないの」

「あせらないでよ、こつからいい所なんだから。偉い人たちはキリスト教を信じるのを禁止したけど、逃げ遅れたペとろさんはこつそり布教を続けていた。偉い人たちはまだ教えを信じてる人たちをあぶり出そうと踏み絵を思い付いた」

「知ってる、マリア様やキリストの絵を描いた板を踏ますんでしょ。踏めたらめでたく無罪放免、踏めなかつたら……」

「ただ日本にいるだけのガイジンさんなら許してもらえる、船が漂着して匿われてたとか適当な理由を付けてね。でもみんなに教えを広めてたのがバレたら凄まじい拷問の末に処刑。さあ踏めとお役人に詰め寄られたペとろさんは……」

「休みたいなあ……」

足立まりあはクラスメイトからいじめを受けていた。

靴や上履きに傘、教科書を捨てられるのは日常茶飯事。酷い時はトイレの個室でバケツの水を浴びせられる。教室では無視されて、お弁当も皆と隔離された隅の机で1人で食べていた。

きつかけはわからない。

自分の何が悪かったのか、真剣に悩んでも結局答えは出せずじまい。リーダー格の蓼科美咲たでしなみさきとは格別親しくないし、何が彼女の気に障ったのかも不明なまま。

ミッション系女子高に進学したのは自分の名前の「まりあ」にちなんだのと、ただ単に制服に憧れたからというのが主な理由で、彼女本人は熱心なキリスト教徒ではない。

……が、もし神様がいるなら、蓼科美咲が車に轢かれて死んでくれますようにと願ってしまうほどに追い詰められていた。

「アナタハ ヲ 信ジマスカ」

唐突に呼びかけられ凍り付く。

全く心配がなかった。

暮れなずむ通学路に一人、虚を衝かれて振り返れば、そこには逆光に黒く塗り潰された怪しい男がたたずんでいる。

見た目は小汚いホームレス。灰色のトレンチコートを羽織り、フケと垢にまみれた格好をしている。髪も伸び放題で年齢不詳だが、肌は不潔に黒ずんでいた。

「何かご用ですか？」

できるだけ丁寧に質問する。愛想笑いに成功した自信はない。

「サア、踏ンデクダサイ」

「えっ」

その手の趣味の人？

「踏ンデクダサイ。ソレガ試練デス」

がらがらにひからびた声。

フケだらけの髪に隠れて表情は窺い知れない。

夕暮れの帰り道で、得体の知れないホームレスに踏めと迫られる恐怖に、すっかり身動きがとれなくなる。

変質者……かどうかは判断を保留するが、どう転んでも不審者には違いない。

どうする？ 逃げる？ スマホで親に知らせる……？ ポケットから出してる時間ももったいない。

追い詰められてパニック寸前、鞆を抱えて涙目のまりあ。

踏めば満足する？ さっさと消えてくれる？

だつたら……

深呼吸で一大決心、キツと前を向く。

「失礼します……」

遠慮がちに断つてから、うなだれ跪く男の右肩を、学校指定のローファーでほんのちよっぴり押す。踏む、と表現するには力が足りない。

まりあは他人に暴力をふるった経験がない。
喧嘩なんてまつびらごめん。

学校ではいじめられているが、他人を傷付けるなんて発想自体が存在しない。彼女にできることと言ったら、せいぜいこの程度だ。

女子高生のローファーで軽く肩口を押された直後……

「アア……」

昇天するかのごとき恍惚の吐息を零すや、紛れもない歓喜の微笑みで顔の筋肉が弛緩していく。

「……ッ!!」

あまりのおぞましさに足をどかすまりあに対し、ホームレスは突然意味不明な言葉を叫んで平伏す。

「襟襟霊魔砂漠谷!!」

「ひ、ご、ごめんなさい!」

痛かった? 力入れすぎた? 怒ったのかなどうしよ、自分がやれって言ったくせに理不尽な。

ホームレスはその場に突っ伏して動かない。

「あ、あの、大丈夫ですか？ どこか怪我したんじや……」

どもりがちに声をかける。

コートに包まれた無防備な背中を一瞥、息を呑む。

謎の男の背には、泥にまみれた大小無数の靴跡が重なり合っていた。

この人、色んな人に足蹴にされてきたんだ……。

「ひどい」

異常な状況にもかかわらず、男への同情心が湧く。いじめられている自分と、境遇を重ねてしまったのもある。

まりあが悲痛に顔を歪めると、男がおもむろに顔を上げて彼女の腕を引く。不意打ちによるめき、その片足が薄汚いコートの背中を踏み付ける。

「やだ!? ちが、今のは」(以下続)

ペとろさん(サンプル)

発行日 2023年8月5日

著者 まさみ
<https://www.pixiv.net/member.php?id=2069269>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
